

# 希望学

東大に「希望学プロジェクト」が立ち上がった。「希望」の正体を解く鍵は、実は「挫折」にある。

玄田有史

将来は年金が減る、経済は中国に抜かれる、働き口がない、少子化が進む、「格差社会」に「下流社会」……。いま日本には、未来を楽観的に見られない空気が漂っています。その一方で、「希望」がかつてないほど語られるようになっていきます。タイトルに「希望」を含む本の出版数を調べてみると、1998年から大きく増加傾向にあります。世界に目を転じてみると、いま「希望」という言葉を最も使うのはアメリカのブッシュ大統領ではないか、と指摘する人もいます。でも、語られている「希望」は本物でしょうか。

これほど「希望」が語られるのは、実は人々の中に希望がないことの裏返しかもしれません。時間の流れが速くなり、ITや金融など刹那的な商業活動が中心になって、みんな「いまの快適さ」「いまの気持ちよさ」を求めています。現在の満足度だけに軸足がある状況では、未来に希望を持つことはありません。

プロジェクトのメンバー中村尚史なかむらなのおみ東大助教授によると、フィリピンで敗残兵になったダイエー創業者の故・中内功なかうちいきおさんは「未来に希望を持たず、今を生きることだけを考えたから生き残れた」と語ったそうです。いまの若者を取り巻く空気も実は近いのかもしれませんが。選択肢がいろいろあって誰でも自由にできるようでいて、現実には人によってその選択肢は限られています。ある意味では、希望を持たないことが、生きる知恵になってしまっているのかもしれません。

東京大学社会科学研究所は2005年度、3年計画の「希望学プロジェクト」を立ち上げました。希望とは何か、社会の中でどういう人が持つことができ、どういう人が持つことができないのか。一見当たり前のようで実は誰も答えを出せていないことを真正面から、インタビューやアンケートなどで分析していくというものです。

私が希望学にかかわるきっかけは、ニートの若者たちと接したことです。彼らは決して働く能力のない怠け者ではありません。それなのに、多くは何をやりたいかが分からず、働くことに希望が見いだせません。希望が泡と化した時に自分の人生をすべて否定される感じが嫌で、あえて希望から目を背けようとすることもあります。そして、じっと立ち止まって働くことの意味を必死に考える、過剰にまじめな側面もあります。

若者だけではありません。やりたい仕事もなければ、希望などをもってどうせ叶わないとあきらめている中高年もたくさんいます。彼らと話しながら、10年後の日本社会のシステムを語るより、目の前にいる人たちが、いまどうして希望を持ってないか、どうすれば希望が

持てるかを一緒に考えたいと思ったのです。

昨年のアンケートではっきりした事実があります。20～40代の人に「やりがいのある仕事に就いているかどうか」を聞いたところ、「中学生の時に将来やりたい仕事があったけれど叶えられず、その後志望を変更しながら叶えていった」という人が、最もやりがいに繋がっていることが分かりました。つまり最初に持った希望を叶えることが重要なのではなくて、挫折し、失望しながら、うまく希望を軌道修正していくことが大事です。

どうしたら、この軌道修正ができるのか。一つの鍵は「ウィークタイズ」(弱い繋がり)です。ウィークタイズな関係にあるような、たまにしか会わない知り合いや学生時代の先輩などは普段違う世界に住んでいるので、違う価値観や気づかなかったヒントを与えてくれることが多い。切れてしまうような緩い繋がりには、実は保つのがとても困難な関係ですが、そんな関係の中で得た情報を通じて、希望を修正しながらやりがいのある仕事に出会えたりするのです。

アンケートから見えたもう一つの事実は、過去に期待された経験のある人ほど希望を持ちやすい、というものです。確かに親の過剰な期待につぶされるという例もありますが、今むしろ深刻なのは、誰からも期待された経験がない人が増えてきているということではないでしょうか。

一方、アンケート結果では、年収や資産によって希望を持てるかどうかの差は、ほぼみられません。お金持ちだから希望が持ちやすく、貧乏だから、下流だから持ちにくいというような単純な問題ではないようです。

徐々に景気回復が叫ばれ、若者たちは就職しやすくなっていくでしょう。しかし、それでも働けない人たちは残ります。「こんなに就職状況がよくなったのに働かないなんてよほど怠け者だ」と、無業者への風当たりが強くなるでしょう。景気が回復したんだからもうサポートは要らないだろうと、公的支援のメニューがどんどん切られる可能性もあります。だからこそ、若者たちがこの時代に希望を持たず働けない根源について考えるべきなのです。

希望とは「<sup>まれ</sup>希にしか叶わない望み」です。だから、そもそも叶わないのが普通です。そういう自分に向き合って克服しながら、社会でどう生きていくかを考えることが大事なんです。いわば「希望学」は「挫折学」だとも言えるのではないのでしょうか。

聞き手・編集部 木村恵子